

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：34311

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K17244

研究課題名（和文）性被害女性の性と生殖における選択および生まれてきた子どものwell-being

研究課題名（英文）Reproductive Choice for victim women and Well-being for born children

研究代表者

小宅 理沙 (Koyake, Risa)

同志社女子大学・現代社会学部・助教

研究者番号：50523536

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000 円

研究成果の概要（和文）：性暴力により妊娠した被害女性の、リプロダクティブ チョイスは、結果として2択になるかもしれないが、産むか産まないかの単純な二項対立の図式ではなく、より詳細に分断しなければ、この二項対立自体が、被害女性へのセカンドレイプ（二次被害）となる可能性が示唆された。つまり、被害女性の社会的な環境においては、中絶という選択肢しかないように思えたケースであっても、後々「子どもに会いたい」「子どもに悪いことをした」「自分の一部を殺害した」との後悔や自責の念に苦しむ状態が明らかとなったが、このような中絶が、被害女性のリプロダクティブ チョイスといえるのかという課題が突き付けられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

望まない妊娠の中でも最たるものの代表として性暴力による妊娠が取り上げられる、あるいは、中絶の是非論の際にも中絶の正当化を主張する際に必ずといっていいほど強調される性暴力による妊娠であるが、「性暴力による妊娠＝中絶」の図式が、逆説的に性被害女性への暴力（二次被害）となる可能性が示唆された。社会において普遍的だと考えられている現象であったとしても、「生命」が関係しているとき、「胎児」が自分自身の一部だと感じるような存在であることなどから、単純な図式では説明ができないことがあり、普遍的なものであっても疑う必要がある、といったことが明らかとなったことには、社会的意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：We must suspect the reproductive choices of sexual violence victim women. We should reconsider whether pregnant women suffering from sexual violence really want to have an abortion. Because some victims may recognize the fetus as part of themselves. Therefore, we should not consider the issue of pregnancy in the binary opposition of giving birth or not giving birth.

研究分野：子ども家庭福祉

キーワード：性暴力 妊娠 胎児

1. 研究開始当初の背景

**研究の学術的背景**

性と生殖に対する女性の自己決定権が十分に認められていない状況において、中絶の権利擁護の立場は、性暴力による望まない妊娠を、妊娠過程の終結を自明視している。それに対し、中絶を「女性の自己決定権」として論ずる是非論に対し一定の距離を置き、より繊細な議論の必要性の指摘もある(山根,2004)。本研究は、性暴力被害女性本人およびサポート機関への質的調査を行い、理論的・実証的両面から、女性の性と生殖への権利の実現に向け、より繊細な論理と実践の必要を明らかにする。

性暴力での妊娠による中絶・出産に関しては、特に中絶の是非について倫理的な議論が中心になされてきた。従来議論は、強姦や近親姦が原因の中絶が法的あるいは倫理的に認められるか否か、中絶は「善」か「悪」か、あるいはパーソン論に基づいて胎児は人間であるか否か、などに限られ、またこれらを論じてきたのは第三者だった。それに対して、女性達が性暴力による妊娠について語った文献として、Malcolm Potts, Peter Diggory & John Peelの*Abortion*(1977)やRoger Rosenblattの*Abortion*(1992)が挙げられる。これらは、性暴力による中絶を女性達の権利とし獲得するために闘った裁判記録や中絶合法化を認めさせるための運動を、様々な文化における共通点として数多く記している。しかし、これら両者の間の差異は大きい。

ただ、両者ともが、性暴力で妊娠すれば被害者女性は中絶を希望するだろうという認識を前提としている。日本でも性暴力(暴行や脅迫)による妊娠は法律で中絶が認められている。法律学や被害者学、犯罪学、心理学の領域においても、性暴力による妊娠の問題は、加害者や国や地方による中絶費負担、そして被害者の中絶後の「トラウマ」へのケア、これらに焦点があたりその重要性が主張されている。これらの法律や政策の方向性は先行研究と一致しており、一般的に性暴力で妊娠した女性は中絶を希望する、あるいは中絶を実施していることが当然だと考えられていることを示している。

しかし、この前提を無条件に一般化することは、それ自体が二次的被害をもたらす可能性がある。申請者は、性被害女性への支援活動から中絶を躊躇する被害者女性も存在することを知った。この認識を前提とし、先行研究をまとめたところ、子どもを産んだ被害者女性に関する研究は全く存在しなかった。日本においては産む/産まないにおける女性の感情や状況についての先行研究はあっても、このような妊娠した被害女性が出産を決意するにいたる経緯やその理由を記述した先行研究、あるいは中絶の決意にいたる経緯やその理由を緻密に記述した先行研究もない。つまり被害当事者女性の状態や心情の変化などは全く把握されていない。

以上を踏まえ本研究では、従来のジェンダー研究において自明視されてきた点、すなわち性暴力で妊娠すれば女性は中絶を希望するという前提を一旦カッコに入れて、当事者が性暴力被害・妊娠・中絶/出産の一連のプロセスの中でどのように自らの世界を生きているのか、他者(子ども)などをどう感受しているのか、など被害者女性が生きる世界を明らかにすることを目的としこれまで研究を実施してきた。そして、これからさらに研究を進展させていくため、特に出産後の育児が一つのポイントになるのではないかとすることを考慮し、生まれてきた子どもに対してのwell-beingや「社会的養護」の実態などにも注目し、妊娠にいたった被害者女性の生殖の自由の実現について提言していく、といったことが研究開始の背景である。

## 2. 研究の目的

本研究は、ジェンダー論およびフェミニズムの共通課題である、人工妊娠中絶（以下：中絶）の権利擁護の立場が、性暴力による望まない妊娠を妊娠過程の終結と自明視することで、逆説的に被害者女性の性と生殖の自由「リプロダクティブ・フリーダム」を侵害する危険性に関し考察することを目的としている。そしてこれらの課題は、well-being / 児童家庭福祉領域における課題ともいえる。なぜなら、中絶選択要因の中の一つに、妊娠継続の先にある「育児」が影響していることも、これまでの申請者の研究から明らかとなっているためである。したがって、性暴力被害における妊娠終結の自明視の危険性を考察していく上では、生まれてくる子どもの「社会的養護」における社会制度・社会体制の考慮なしでは、被害女性の生殖の自由における提言はできないという立場にて、研究を進めることが、研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

文献研究および、インタビュー調査実施

## 4. 研究成果

性暴力により妊娠した被害女性の、リプロダクティブ チョイスは、結果として2択になるかもしれないが、産むか産まないかの単純な二項対立の図式ではなく、より詳細に分断しなければ、この二項対立自体が、被害女性へのセカンドレイプ（二次被害）となる可能性が示唆された。

つまり、被害女性の社会的な環境においては、中絶という選択肢しかないように思えたケースであっても、後々「子どもに会いたい」「子どもに悪いことをした」「自分の一部を殺害した」との後悔や自責の念に苦しむ状態が明らかとなったが、このような中絶が、被害女性のリプロダクティブ チョイスといえるのかという課題が突き付けられた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中典子 小宅理沙	4. 巻 第4号
2. 論文標題 多文化の子ども・子育て支援に必要なこと	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地域福祉サイエンス	6. 最初と最後の頁 117と123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宅理沙	4. 巻 5
2. 論文標題 企業および大学における子育て支援の取り組み	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 社会福祉科学研究	6. 最初と最後の頁 pp.295-pp.310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宅理沙	4. 巻 第2号
2. 論文標題 インドネシア共和国における地域福祉の現状と今後の課題	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 地域福祉サイエンス	6. 最初と最後の頁 263-279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計8件

1. 著者名 小宅理沙	4. 発行年 2019年
2. 出版社 『最新 保育士養成講座』総括編集委員会	5. 総ページ数 194
3. 書名 社会福祉	

1. 著者名 小宅理沙 中典子 潮谷光人	4. 発行年 2017年
2. 出版社 翔雲社	5. 総ページ数 205
3. 書名 社会的養護・社会的養護内容	

1. 著者名 小宅理沙 西木貴美子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 翔雲社	5. 総ページ数 125
3. 書名 相談援助・保育相談支援	

1. 著者名 小宅理沙・西木貴美子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 大学教育出版	5. 総ページ数 141
3. 書名 NIE 児童家庭福祉演習	

1. 著者名 小宅理沙	4. 発行年 2017年
2. 出版社 青山社	5. 総ページ数 136
3. 書名 子ども家庭福祉	

1. 著者名 小宅理沙	4. 発行年 2016年
2. 出版社 現代図書	5. 総ページ数 150
3. 書名 社会福祉論	

1. 著者名 小宅 理沙・西木貴美子・野尻美津代	4. 発行年 2016年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 135
3. 書名 障がい児保育の基本と課題	

1. 著者名 小宅理沙	4. 発行年 2015年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 135
3. 書名 現代の保育と家庭支援論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----